

【はじめに】

猫の肺原発腫瘍は比較的稀であり、予後不良なことが多いとされている。発症平均年齢は12-13歳、性差に偏りはなく、ベルシャ以外での好発猫種は報告されていない。今回気胸を主訴に当センターへ来院した猫の肺腺癌を紹介する。

【症例】

ロシアンブルー 12才 雄

【経過】

朝から呼吸が荒く、元気がないと主訴でかかりつけ病院受診。胸部X線検査にて気胸と診断され、当院へご紹介頂き、即日入院して頂いた。

【当院来院時所見】

開口呼吸 心拍210/min 呼吸数84/min 体温39.8℃ 舌色チアノーゼ

【検査/処置】

酸素吸入下で採血、X線撮影、静脈の確保を行った。
緊張性気胸と判断し、左胸部より胸腔穿刺にて空気200ml、粘稠性の高い乳び様胸水を抜去、静脈点滴により全身状態の安定化を図った。空気抜去後、再度X線撮影を行い、肺野の広がりを確認した。
重度の胸膜炎、化膿性肺炎と判断し、入院治療にて全身状態の安定がえられた段階でCT検査、胸腔ドレーン設置を行った。

【CT検査】

左肺前葉前部は虚脱、後部は石灰化を伴う腫瘍とブラを認める。
左肺後葉には石灰化を伴う腫瘍性病変と巨大なブラが認められ、左の胸腔内は気胸となっている。
肺門リンパ節、胸骨リンパ節の腫大。

【手術】

左肺後葉腫瘍性病変のブラ破裂による気胸と診断し、左肺前葉後部、左肺後葉の外科的摘出を実施した。
プロポフォルにて導入し、イソフルランにて維持。フェンタニルの持続点滴にて疼痛管理を行った。
開胸は第5肋間から行い摘出した腫瘍は病理検査へと提出した。
切除後は患側に胸腔ドレーンを2本設置し、定法に従って閉胸した。

【術後経過】

周術期は酸素室にて管理し、胸腔ドレーンより胸水の貯留量をモニターしながら4時間ごとの抜去を行った。
術後3日でほぼ胸水の貯留が消失したため、ドレーンの抜去を行った。
術後経過は良好で、食欲も回復したため、術後6日で退院した。

【病理結果】

左肺前葉後部：肺腺癌(気管支肺胞腺癌)
左肺後葉：肺腺癌(気管支肺胞腺癌)

【初診時血液検査】

WBC	404	× 10 ² /μl
Band-N	0	× 10 ² /μl
Seg-N	391.9	× 10 ² /μl
LYM	12.1	× 10 ² /μl
MONO	0	× 10 ² /μl
EOS	0	× 10 ² /μl
BASO	0	× 10 ² /μl
RBC	8.79	× 10 ⁶ /μl
Hgb	12.6	g/dl
Hct	41.0	%
MCV	46.6	fl
MCH	30.7	g/dl
PLT	13.6	× 10 ⁴ /μl
ALT	35	U/l
ALP	53	U/l
BUN	24.3	mg/dl
Glu	270	mg/dl
Alb	3.1	g/dl
TP	7.8	g/dl
pH	7.353	
CO2(静脈血)	34.4	Torr
O2(静脈血)	28.5	Torr
Na	154.2	mEq/l
K	3.61	mEq/l
Cl	115.1	mEq/l
Ca	2.6	mEq/l
HCO3	18.7	mmol/l
BE	-6.9	mmol/l

【初診時X線画像】

DV撮影

右

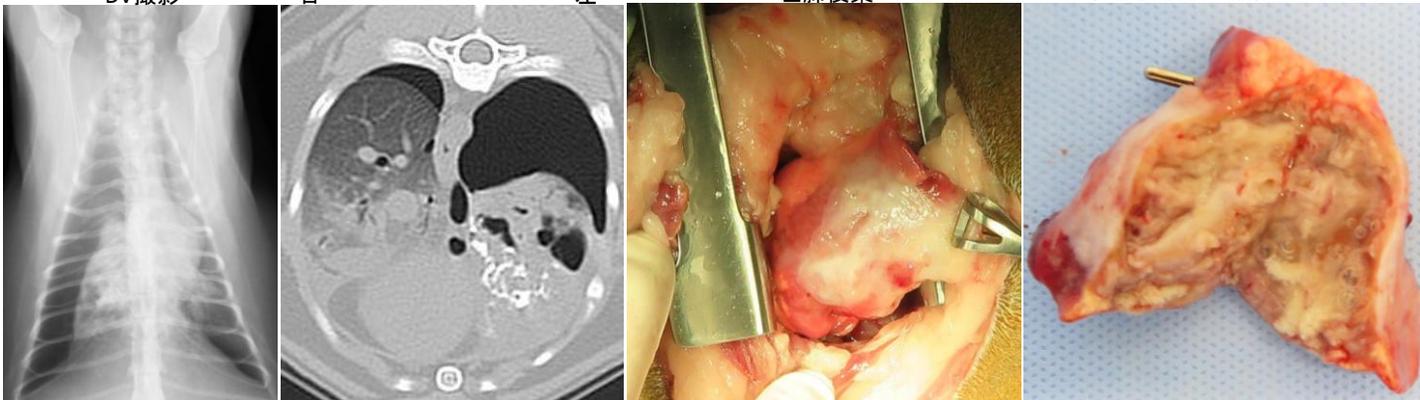
【CT画像】

左

【術中写真】

左肺後葉

摘出した左肺後葉腫瘍剖面



【考察】

本症例は細気管支周囲より発生した腫瘍が肺実質へ浸潤性に広がり、形成されたブラが破裂して気胸を引き起こしたものと考えられた。
CT検査を行った猫の肺原発腫瘍55頭の内訳は腺癌47頭、6頭が気管支由来、3頭が腺扁平上皮癌、1頭が扁平上皮癌であり、45頭が後葉での発生だったと報告している(右後葉28頭 左後葉17頭)。この報告によれば肺内転移を起こしている割合は以前の報告より高いことが疑われるとしている。本症例では同様の増殖形態を示す気管支由来の肺腺癌との診断が2カ所から出ており、既に肺内転移を起こしていると考えられ、予後は限定的と考えられる。
また肺原発腫瘍を手術した猫20頭の予後を調査した報告では、診察時に呼吸困難、胸水の存在など臨床症状を伴っている症例の場合の術後生存期間中央値は4日、症状がない症例は578日だったとしている。この報告の4日というのはかなり偏っていると考えられるが、本症例は当院初診時は緊張性気胸の状況下であり、時間経過によっては救命出来なかった可能性が高い。既に肺内転移があるものと考えられるが、現在は元気食欲の回復がみられており、ダメージコントロール手術としては有効だったと考えられる。

【参考文献】

- SMALL ANIMAL Clinical Oncology 4th ed P453
- Vet Radiol Ultrasound 2015 May 56(3)272-7
- J Feline Med Surg 2014 Dec 16(12)979-84

当院では猫の原発性・転移性肺腫瘍に遭遇する機会が増えており、症例の蓄積を待って統計的な数値をご呈示出来るよう努めて参ります。
本症例をご紹介頂きました病院様に感謝致します。